

『三葉集』

田漢・宗白華・郭沫若著

その4－2「郭沫若より宗白華への手紙」(翻訳・訳注と解説)

原題：「郭沫若致宗白華」)

顧 文* 岩佐 昌暉**

Kleebatt by Tian Han, Zong Baihua&Guo Moruo

Letters to Zong Bai hua from Guo Moruo No. 4－2 with Annotation

by

GU Wen, IWASA Masaaki

(Received October 31, 2015)

【その4－2】

僕たちは今ちょうど汽車の中です！僕たちは太宰府へ行く途中なのです。太宰府はここからはまだ遠くて、博多駅から汽車【補注1】で、二日市まで十マイル【1マイル＝1.6094^{キロ}メートル】、二日市から太宰府までなお二マイルぐらいあります。今日はとてもいい天気です。汽車は青々とした田畑の中を疾走しています。まるで勇猛で毅然たる少年が希望に満ち溢れる前途に向かって努力し、奮闘しているようです。飛んでいる！飛んでいる！すべての青々とした生命の燦爛と輝く光の波が僕たちの眼前で舞い上がります。飛んでいる！飛んでいる！飛んでいる！僕の「自我」がこのあふれる雄渾な Rhythm(リズム)¹の中に融けこ

んでいきます！僕は汽車全体、そして大自然全体と完全に「合而為一」【合体して一つになる】です！僕は車窓に寄りかかりながら、ぐるぐる旋回し舞い飛ぶ自然を眺めています。ゴットンゴットンという車輪の進行曲を聞きしていると、痛快！痛快！僕は立体派詩人マックス・ヴェーバーの The Eye Moment (瞬間) の詩を朗読しています²【補注2】。

色彩、立方体、立方体、立方体、立方体、
高く、低く、また高く、そしてより高く、より高く、
遠く、遠く地の果てまで、地の果て、地の果て、
遠く、
平面、平面、平面、

* 東海大学経営学部観光ビジネス学科教授

** 九州大学名誉教授 日本郭沫若研究会会長

¹ 英語。韻律。

² 立体派とは、20世紀初期欧米の絵画と詩歌における現代アートの流派である。Max Weber (1881－1961) は、アメリカ現代画家、詩人、散文家で、『立体派詩篇』という詩集を編む。

色彩、光の輝き、記号、汽笛、鐘の音、呼子の音、

平面、平面、平面、

目、目、窓格子の穴、目、目、

鼻孔、鼻孔、煙突の噴出孔、

呼吸している、燃えている、噴きだしている、

叫んでいる、噴きだしている、呼吸している、
噴き出している、

何百万ものモノが、互いに重なり合い、

何億ものモノが、互いに上になり下になり、

目の中でこのように考えるならば、実体の眼中
にはこのように見える、

ハドソン川の川べりに、

とめどなく流れ出し、終わることなく激しく湧
き出し、

湧き出し、噴き出し、湧き出し、噴き出す……

この詩は、汽車の中で朗読してはじめてその妙
味が分かります。それは時間の記録で、動きの律
呂（音階）なのです。

最後の一句は、河流の自然の音階を借りて、全
宇宙が時間を問わず、昼夜を分かたず流れゆき、
流転していくことを表現しようとしています。実
に巧みです、実にうまい、訳しようがありません、
訳しようがないです。

飛んでいる！飛んでいる！飛んでいる！僕が
車中で僕の立体詩を作っている時に、汽車が小さ
い駅に止まりました。車掌が検札に来ました。僕
は切符を手に、寿昌兄と一緒に車窓から外を眺め
ていました。飛んでいる！飛んでいる！……僕
はまだ、声に出していましたが、おっ、は！切符
が僕の手から飛んで行ったのです。汽車はもう動
いていて、ゆっくり前に進んでいます。考える暇
もなく、僕も車窓から飛び降りました。今や寿昌
は一人車中に残り、僕は車外ということになりま
した。僕が切符を手につかんだ時には、汽車はも
う遠くに往っていました。僕は飛ぶように走って

追いつこうとしましたが、追いつけませんでした。
駅まで戻ると、壁にかかる時計がちょうど 11 時
を打ち鳴らしているところでした。次の列車の時
間を聞いてみると、1 時半までないとのこと。駅
の名前は雑餉隈（ざっしょのくま）といいます。
この名前から考えると、元軍東征の史実と関係の
ある場所のようも思います。この一帯すべて当時
の戦場だったからです。二日市までまだ五マイル
あります。僕はそこで路線に沿って大股に歩いて
いくことにしました。

汽車の中で自然を観察するのは近代人の頭で
す。田畑の中を徒歩で進み、青くなりかけの麦苗
と細くゆっくり流れる小川を眺めるのは、ミレー¹
の農民画の中の人物ですが、僕もまた「葛天氏之
民歟？無懷氏之民歟？」【葛天氏の民か、無懷氏
の民か（葛天氏、無懷氏はともに古代の伝説中の
帝王）】²になってしまいました。歩きながらゲー
テの「風光明媚の場所」【補注3】を朗読してい
ました。自分でも四森林州湖【補注4】の畔、ア
ルプスの山の麓を歩行しているような気がしま
した。僕は本当に光の海に浮んで漂っているよう
でした。次のような気持ちが大いにありました。

徒歩で、心も軽く、僕はこの広々とした道を歩
く

健全な世界、自由な世界が、僕の前にある、

褐色の長い道が僕の前であり、僕の行きたい方
向へどこへでも導いてくれる。

これからは、僕は幸運を望まない――

僕自身が幸運の化身だから

これからは、僕はもうさめざめと泣いたりしな

¹ ミレー (Jean Francois Millet, 1814-1875) とは、
フランス画家。代表作には「落穂拾い」と「羊飼
いの少女」等がある。

² この語句は、陶淵明の『五柳先生伝』に由来。

い、もう躊躇しないし、何も必要としない、

雄々しく、満足して、僕はこの広々とした道を歩いていくのだ。

ホイットマン『広々とした道を歩く』¹ Song of open road

僕は永遠に、この健康の道を、自由自在に歩き続けたいのです、僕の死ぬその日まで。ハイネの詩は、美しいが雄々しさに欠けます。ホイットマンの詩は雄々しいが美しさを欠いています。両者とも僕は好きです。両者ともまだ僕を満足させるには足りません。ですから、「何も必要としない」という段階には、僕はまた到達できていないのです。ゲーテの「風光明媚の場所」のような詩をたくさん手に入れ、徹底的に読んでみたい、口角唾を飛ばすほど、声帯が断裂するまで朗読してみたいと心から思います。雄々しくまた美しい巨作は、我が国の古い文学にはめったにありません。僕がとりわけ好きなのは自然を賛美する詩なのですが、この条件を満たす文章は、残念ながら僕の読書範囲が少なすぎて、またお目にかかったことがないのです。木玄虚の『海賦』²と、郭景純の『江賦』もみんな良い題名ですが³、惜しいことにどれも良い文章ではありません。『海賦』の中には鯨の描写に「巨鱗挿雲・・・」【巨鱗 雲を挿す】等の言葉を使っていますが、どうして鯨の体から鱗が生えてくるのでしょうか！僕には分かりません。——鯨ということになりますと、僕は一つ

の逸話を覚えています。60 年余り前、アメリカの軍艦がはじめて日本に現れた時、日本人は艦が煙を噴出しているのを見て、鯨が水を噴いていると思ったのです。船底に鯨が沢山いて、それでこういう怪しいことが起こっていると思ったというのです（前田慧雲氏著『力之生活』に見える）⁴。しかし幾ばくもなくして、日本人は自前で巨大な戦艦を造る能力をもち、海上を睥睨し、堂々となんと「五丁」⁵の列に入ったのです。——韓退之の『南山詩』とロバート・サウジーの『The Cataract of Lodore』は一時はよく似ていると思いました⁶。彼らは、二人とも懸命に対象を浮き彫りにすべく描写に尽くしていますが、惜しいかな、思い存分頑張っても、所詮一枚の写真にも及びません。結局のところ終南山とロードア滝のバラバラの残骸、死んだ姿を描いたにすぎません。近ごろ、Coleridge⁷の『モンブランの朝を賛える』

⁴ 前田慧雲（1857－1930）、号は含洞道人、日本の仏教学者である。著書に『前田慧雲全集』8巻がある。

⁵ 五丁、即ち「五力士」。『水経注』沔水注に「秦恵王欲伐蜀、而不知道、作五石牛、以金置尾下、言能屎金。蜀王負力、令五丁引之成道」【秦の恵王、蜀を征伐せんと欲す、しかれども道を知らず、五頭の石牛を作り、金を以て尾下（尻尾の下）に置き、能く金を屎（便として出す）すと言う。蜀王、力を負（たの）み、五丁をして、これ（石牛）を引き、道を成（つく）ら令（し）む】とある。ここでは、日本が当時すでに「世界五強」に躍進したことを指す。

⁶ 韓退之（768－824）、名は愈、河南南陽（現在の河南孟県西）の人。唐代の文学者。『韓昌黎集』がある。彼の『南山詩』は、終南山の四季の景色と山の地勢の姿を描写している。用語は誇張多く、晦渋である。Robert Southey・ロバート・サウジー（1774－1843）、英国詩人。湖畔詩派の代表者である。作品の多くは、封建制度を美化し、神秘的色彩に満ちている。『The Cataract of Lodore』は、『ロードア滝の歌』の意。

⁷ サミュエル・テイラー・コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）、英国詩人、批評家。湖畔詩派の代表。

¹ 即ち、ホイットマンの『大いなる道の歌』。

² 木玄虚、名は華で、広川（現、河北棗強）の人である。西晋の文学者。辞賦を得意とした。現在『海賦』一篇のみが伝わる。その中に「巨鱗挿雲、鬣鬣刺天」【鬣鬣は天を刺す】とある。『昭明文選』巻12に所収。

³ 郭景純（276－324）、名は璞で、河東聞喜（現、山西に属す）の人である。晋代の文学者。詩賦に長じた。『郭宏農集』がある。『江賦』は『昭明文選』巻12に所収。

(Morning Hymn to Mont Blanc) を読むことができました。それはゲーテが歌った詩の境地と同じものです。詩の雄麗さもゲーテと釣り合っていると思います。詩はかなり長いので、すべて抄録できないことを許して下さい。面白いのは、コールリッジも滝を詠むときに「Who bade the sun clothe you with rainbows?」¹【君に虹を羽織らせるようにと、誰が太陽に言いつけたのか】と表現していることです。同じく虹で滝を形容しています。この二人のうち誰が誰を模倣したのか、私には分かりませんが、二人が同時だったなら、あるいは恐らく「英雄の見る所」【諺の「英雄所見略同」（優れた人の考えることは大体似通っているものだ）を踏まえている】なのでしょう。コールリッジは出世【世を離れる】の詩ですが、ゲーテは入世【社会に入っていく】の詩です。コールリッジは神を賛美していますが、ゲーテは人生を賛美しています。出世の意志があつてこそ、入世の技量も持ち得るのです。

—— 寿昌は一人で列車に乗っている。どんなに寂しい思いをしていることか？二日市駅に着いた時、降りなければいけないことを知っていればいいが……

僕は歩きながら、こんな事も考えていました。列車から飛び降りなければよかったのに、寿昌を列車に残して、一人にさせなければよかったのに、と後悔していました。もし寿昌が二日市駅で乗り越してしまったらと心配で、ですからとても焦っていました。歩きに歩き、歩き続けて、およそ一時間ほど歩いて、着きました、二日市まで着きました。街を通過して、まっすぐ二日市駅まで寿昌を探しに行きました。もし見つからなかったらど

うしようかと心配でした。駅付近まで行ったとき、寿昌が一軒のうどん屋から飛び出してきて、後ろから僕を呼んだのです。ああ、本当に嬉しい！心の中を押さえていた巨大な岩石がやっと無くなりました。寿昌は、君は不注意すぎる、50銭のため、なぜわざわざこんな危険を冒すようなことをしたのか、幸い列車から飛び降りた際に、怪我などしなかったからよかったものの、と僕を咎めました。僕自身も、どうしてあんな愚かなことをしたかがよくわかりません。しかし、もう後悔していません。一つのささやかな冒険をし、五マイルの広々とした道を歩く経験を手に入れたのです²。僕はこの健康的な倦怠感を味わっています。

二日市から大宰府まで本来ならば軽便鉄道とモーターバイクで行けますが【補注5】、寿昌が徒歩で行けば存分にお喋りできると言い出しました。僕たちはそこでまた「徒歩で、心行くまで、広々とした道を歩み出し」たのです。

—— ああ、今日は本当にすごく楽しい！永遠にこのような生活を過してみたい！

—— 沫若、君はどう思う、もし車で来たなら、こんな楽しいことは絶対ないだろう、途中を詠む良い詩など絶対生まれてこないだろう！

—— ベートーヴェン (Beethoven) の『月光』も散歩の中から得られたものだ³。彼は夜の散歩で、クラヴィコートの音に誘われ、一軒の崩れ落ちそうな小屋の前にやってきた。音が小屋から流れてきている。ベートーヴェンは扉を叩き、ゆっくり中に入った。小屋の中には光

² マイル、英語 Mile (英里) の音訳。

³ ベートーヴェン (Ludwig Van Beethoven, 1770-1827)、ドイツ作曲家。『月光』の作曲について、散歩から得られたものという伝説は、史実とは異なる。

¹ 英語。「君に虹の衣裳を羽織らせると、誰が太陽に言いつけたのか。」

はなかった。盲目の兄と妹がクラヴィコートの傍に坐り、月光が窓からクラヴィコートの上に注いでいる。ベートーヴェンはクラヴィコートを弾かせてくれるように頼み、そうして『月光』のような素晴らしい曲ができた。帰ってからすぐに譜面に書き記そうとしたが、すでに大半を忘れていた。世に伝えてきた『月光』は、もはや盲目人の小屋で弾いた **Original** の素晴らしい曲ではなくなっている¹。凡そ芸術品は、だいたい最も注意を払っていない所で得られるものが最も絶妙の品だ。僕たちが今日作った詩も、恐らく帰った時には、全部を書き出すことができないだろうさ。

—— そのとき書ける分量を、できるだけ書くまでだよ。

これらは、僕たちが大宰府に着いた後、その近くの飲食店で交わした会話です。僕たちが、二日市から大宰府まで歩いて行く途中、明るく燦爛たる自然が僕たちに無限の詩の素材を提供してくれました。僕たちの声帯から、たくさんの自然の牧歌がぼんぼんと飛び出しました。僕たちは、道に沿いながら、歩き、道に沿いながら詩を吐き出しました。風景を見て、詩情を生じるや、即興で吐き出すのです。しかし残念なことに、今、その十分の一、二さえも覚えていません。ただ、途中の僕たちの話の中で、詩を作るコツをいくつか悟ったことは、まだ覚えています。道に沿って歩き、澄み渡った空から時に透き通った鳥の鳴き声が聞こえます。鳴き声は聞こえるのに姿は見えないのです。僕は寿昌に言いました。「これは、絶好の詩の素材だよ！例えば：

鳥兒！ 鳥よ！

¹ 英語。原作の意。

你在甚麼地方叫？ 君はどこで鳴いているのか？
你是甚麼鳥兒？ 君はどんな鳥なのか？
你的歌聲怎樣第地中聽呀！

君の歌声はどれほど耳に心地よいことか！
你唱得我的靈魂怎樣地陶醉呀！

君の歌は僕の魂をどれほど陶醉させることか！

この「甚麼（どんな）」と「怎樣（どのように）」などの文字に、すこし想像化の力を加えよう、どうせ行きつ戻りつして発展して行くんだ、そうすれば素晴らしい良い詩になるぞ！」寿昌は「このままで、実感なんだから、もうこれでよいと思うよ、これ以上発展させる必要はない」と言いました。僕は帰宅してから、すぐに Shelley・シェリーの『ひばりの歌』を読みました²。Ode to a sky lark、おう！彼の詩は僕が実感した始原の細胞に基づいて、一篇の素晴らしい抒情曲にまで発展したものでした。彼のこの詩について、デ・ミル (De Mille) は「美の精神が貫かれ、美の神髄を発揮し尽くした作品だ。崇高かつ明るく清潔な愉悅の詩意が充ちていて、世に現存する短篇詩などとは比較すべくもない」と評しています³。他人の批評の如何については、僕はしばらく口を挟みません。僕がシェリーの詩を読んだ感激を、ホイットマンの詩二句を借りて、シェリーに示したいと思います。

You express me better than I can express myself,

You shall be more to me than my poem.

² 即ち、シェリーの『ひばりに寄せて』

³ デ・ルミ (James De Mille, 1836-1880)、カナタの小説家、文学批評家。ダルハウジー大学で英国文学を教授していたことがある。

Song of the open road! ¹

シェリーの詩は全部で21節です。今、無理やりになんとかそれを訳してみました。どうぞお読みになってみてください【補注6】。

（一）歓楽の霊なるか？汝は禽羽の族に非ず。
遠く天の郊より、汝が胸膈に傾瀉す。
涓涓として流れる泉のごとく、
毫も思索を費やさず。

愉快な精霊だろうか？お前は鳥の一族ではない。
遠く空の果てから、心を込めて流れ出す。
ゆっくり流れ出る泉のように、
何ひとつ考えることなく。

（二）高く飛び復た高く飛び、
汝は地より飛び上る。
宛（あた）かも一の火の雲の如く、
翮（はね）を振り寥蒼（あおぞら）に泛ぶ。
歌唱し以て翱翔【とびまわる】し、
翱翔し復た歌唱す。

高く飛び、さらに高く飛んで、
お前は地上から飛びあがる。
火と燃える雲のように、高く青空を飛び回り。
歌いながら飛びまわり、
飛びまわりながら歌う。

（三）旭日猶お未だ昇らず、
燦たる雲 東の曙を罩（おお）う。
金色の光輝の中、
汝は已に浮き馳着（はせ）ていたり。

¹ 英語、君は僕の気持を表現してくれた、僕自身が表現するよりもっと徹底的に、僕にとって、君という存在は僕の詩よりもっと意味をもつだろう。

宛かも初生を楽しむがごとく、

旭日は、なお登っていない、
輝く雲が、一面に東の曙を覆う。
金色の光り輝く中を、
お前はもう浮き上がり疾駆している。
生まれたてを楽しむように、
影もなく痕跡もなく。

（四）汝の周遭に、
夜光 嫩（やわら）かなる紫に融（と）けたり。
宛かも昼時の星の如く、
渺として汝の影を衣（き）ず。
汝の影見るべからざるも、
吾は聞く瀏亮【澄みとおって明るい】の声を。

お前の周りでは、
夜の光が柔らかな紫に融けこむ 昼の星のように、
渺（かすか）でお前の姿を身に纏っていない。
姿は見るができないが、
僕には、お前のさえずる響きが聞こえる。

（五）暁日【明け方】の爛銀盤【明るい銀の皿：「明月」の比喻】、
利箭【鋭い矢】何ぞ鋒鋭【するどい】なるや！
曙白く澄む空中、
烈光 漸（ようや）く消えて微かなり。
看到し分明ならざるも、其の在りし所を感じずべし。

明け方の月、矢のような光は何と鋭いことか！
明け方ごろ白く澄む空に、
眩しい光もようやくかすんでいく。
はっきり見えないが、
お前の所在はしっかりと感じた。

(六) 遍く地と寰空【大空】、汝の声音で満た為
(さ) る。

宛かも夜の皎潔たる、
月の 孤雲より泛(うか)ぶが如し。
皓皓【光り輝く】として明波
舒(のびやか)に、天空は為に汙濫【溢れる】す。

地上と大空は、お前の声で満たされている。
まるで夜の白く光る、
月が一片の雲の間から浮かぶようだ。
浩々として明るい月光の波が伸びやかに、
大空に溢れる

(七) 汝の名 吾は知らず、
汝は竟(つい)に何の似る所ぞ？
燦雨 虹霓に落ち、汝の声の媚(こび)無し。
汝が歌 何ぞ幽かに颺(あ)がり、
音の雨を散洒す。

お前の名前を僕は知らない、
お前はいったい何に似ているか？
燦爛たる雨が虹に降り落ちるが、
お前の声のなまめかしさはない。
お前の歌は幽かに舞い上がり、
雨のように舞い散る。

(八) 宛かも一詩人の、
藏(かく)れて知光の里(うち)に在るが如く。
靈感天より来たりて、
曠渺【空漠渺茫】に頌歌起こる。
歡(よろこ)び恐らく意外を生ず、
世人の悲喜と為る。

ひとりの詩人が、
知恵の光に隠れて生きているように。
インスピレーションが天から降りて来て、

渺茫とした彼方より賛歌が起きた。
歡喜のさなかに恐らく意外な出来事が生まれ、
世の人々の悲しみや喜となる。

(九) 宛かも一閨秀【大家の令嬢】の、
藏れて金屋【屋敷】の里に在るが如し。
幽夜 歡とする所を懐く、断腸の魂 慰め難し。
独り自ら撫して琴を鳴らせば、
芳情 幽間(門構え、中は「田」)【女性の居室】
に漾(ただよ)う。

大家の令嬢が、
屋敷の奥に隠れ住んでいるかのように。
幽かな夜に愛を懐くが、断腸の魂は慰め難く
独り琴をつまびくと、
愛の思いが部屋にただよう。

(十) 又た金色の蛍の、藏れて露潤に在るが如し。
閃閃として幽光 耀き、散じて花草の上に点ず。
花草は明蛍を障(さまた)げ、
蛍身 見るべからず。

又た黄金の蛍が、
谷間の露に隠れるているかのようにだ。
きらきら幽かな光が耀く、ばらばらに散らば
って花や草の上に小さな灯りをともし。
花々や草が蛍の光を遮り、
蛍の姿は見るできない。

(十一) 又た玫瑰花の、
藏れて碧葉の里(うち)に在るが如し。
暖風 花芯を破り、
歴歴(そよそよ)と清芬【清らかな花の香】を吐
く。
香を偷む狂蜂兒、神魂 已に陶醉す。

またバラが、
緑の葉陰に隠れて咲いているかのようだ。
暖かい風が蕾を綻ばせ、
ふんわりと清々しい香りを吐く。
香りを偷む狂ったような蜂たち、
魂はすでにすっかりうっとりしている。

（十二）草上の春雨の音、
花は夢より驚き醒（めざ）む。
一切の歓愉【嬉しく楽しい】の歌、
一切の清新の調（しらべ）。
清新復（ま）た歓愉、汝が音楽の好（よ）き無し。

草の上に降る春雨の音で、
花は夢から目覚めた。
すべて歓喜愉悦の歌よ、
すべて清新のメロディよ。
清新でそのうえ歓喜愉悦の歌も、
お前の音楽には及ばない。

（十三）霊呀（や）飛ぶ鳥呀、汝は其れ我に教え
し者：
汝が思いは何すれぞ甘にして芳なるや、
神韻は濃きこと是（かく）の若（ごと）し！
愛と酒の頌、聞き得たること未だ曾つて有ること
なし。

精霊よ 鳥よ、お前は僕に教えてくれた者だ：
汝の思いはどうして甘く香ばしいのか、
神韻もこんなに濃いのだ！
愛と酒の賛歌を、
これまで一度も聞けたことがない。

（十四）合歓の情歌、軍旋の凱唱、
汝と相い比方（くらぶ）れば、
徒（ただ）浮誇に事（つかう）るのみ。

情歌、凱唱の中、物に於いて足らざる有り。

愛の情歌も、軍の凱旋の歌も、
君の歌と比べれば、
ただ大げさに飾り立てただけ。
情歌や凱旋の歌の中に、
内容に満たされぬものがある。

（十五）汝が歓楽の調べ、源泉は是れ何物ぞ？
何れの波、何くの山野か？天、陸の何の形殻か？
汝が愛は為伊何（なんのため）か？
憂いを忘るるは究（つまり）は何若（いかん）？

お前の歓喜のメロディの、
その源泉は一体なにか？
どんな波か、どんな山野か？
空、陸ともどんな形か？
お前の愛は誰のためか？
憂いを忘れるのは結局どうだろうか？

（十六）汝が歌は、清くして鋭し、
歓楽して疲れを知らず。
煩悩の陰影、汝が心に近づく能（あた）わず。
誰（たれ）か能（よ）く、
汝が心の如く、純愛にして憂悶無からん？

お前の歌は、清々しく鋭い、
楽しく喜ばしく疲れを知らない。
煩悩の影も お前の心に近づけず。
お前の心のように、
純愛で、憂愁も無い人がどこにしようか？

（十七）汝は生死の理に於いて、
夙夙と【早くから】必ず思い省（かえりみ）ん、
我ら酔夢の人に比ぶれば、
之を知ること深くして且つ真ならん。

然らざれば汝が諧調【快い調べ】、
何を以て流晶のごとくならんや？

お前は生と死の道理について、
きっと早くから思い巡らしていただろう、
僕らのような酔生夢死の生を過ごしている者よ
りは、
もっと深く人生の真実を知っている。
でなければお前の心地よい歌が、
どうして流れる水晶のように透明なのか？

(十八) 前を瞻(み) 後を顧み、
人欲は足るを知らず。
至誠の笑声、中に痛苦の絡む有り。
至甘の歌詞は、是れ一部の愁思史なり。

前をみたり後ろをみたりして、
人の欲望は満足ということがない。
真誠な笑い声、中には苦痛が絡んでいる。
甘い歌詞は、一部の愁思の歴史である。

(十九) 吾人は縦(ゆる) され可能ならば、
憎驕懼【憎悪、驕慢、恐懼】を滅却せん、
縦(たと) い生【人生】岩石の如くなるも、
眼涙を流すこと会(ありえ) ず、
汝の如き純飲を得ん？我が知る所の者に非ず。

僕は可能ならば、
憎んだり、自慢したり、恐れたりを無くしてしま
いたい。
たとえ人生が岩石のようであっても、
涙を流すことなどありえない、
お前のような素直の歓喜を手に入れる？
僕の知ったことではない。

(二十) 詩人は汝の歌の巧みさを愛す、

貴ぶこと百韻律に比(なら) ぶ。
万巻の書を読破すれど、書中に此の物なし。
汝は高く揚りて天に在り、此の塵俗を藐視せり。

詩人はお前の巧みを愛し、
百韻律と同じくらい貴んでいる。
万巻の書を読破したが、
書物の中には見つからなかった。
お前は高く舞い飛び空にいて、
この俗世間を蔑視している。

(二十一) 請う汝の脳中より、
我に一半の楽を賜え
我が唇齒の間をして、此の諧醇を流し出さしめば
能く世人の耳を傾けせしめん、我の
汝が曲を聴くがごとくに。

お前の頭の中から、
その半分の喜びを分けてくれ、
僕の唇と歯の間から、
この混じりけのないハーモニーが流れ出せば、
世の人々が耳を傾けてくれるだろう、
僕がお前の曲を聴くように。

詩を訳すことには無理があります。無理に訳し
てみても、原作の色も香も減って、まるっきり詩
になりません。僕はシェリーにお詫びしなければ
いけないし、君にも詫びなければなりません。君
は、僕のこの意味の通じない翻訳詩を読んでも、
恐らく何を言っているのか、理解できず、貴重な
時間をむだに費やしてしまうでしょう。やはり原
作を読んだほうがよいと思います。

夕暮れの鐘の鳴る音は、クレイの『田舎の墓地

で書かれた挽歌』に発展しました¹【補注7】。雲雀の一声は、シェリーの喜びの曲となりました。ここに、詩の秘訣、詩の Embryologie【胎盤】² を見るのです！自然と詩人との一体です。

大宰府は、僕のあの『登臨』という詩の胎盤です【補注8】。その詩の境地について、寿昌に一つ一つ教えました。梅の花はすでに半分以上散ってしまいました。春水もすでに動き出しました。すべてのものが燃焼しているように見えます。悲鳴をあげていた鳩たちも、今日は一羽も見当たらない、たぶん光る空へ飛びまわりに行ったのでしょう。銅の馬のほか、楼門の前にはさらに銅の麒麟、銅の牛、銅の獅子が左右に各一体並んでいます。僕たちは門の左側に行き、寿昌が麒麟を撫で、僕は銅牛の背中にまたがりました。紅梅が一本傍にあり、満開の梅の枝が見下ろして、牛の背中を軽く覆っています。寿昌が笑いながら言います、「沫若！僕が傷鱗の孔丘で³、君は牛に乗っている李耳だよ⁴」。その言葉を聴いて、僕は急いで獅子の台座の上に立って言いました、「僕は『道德経』五千言を書いて獅子吼【真理・正義を主張する大演説】するぞ！」⁵しかし、獅子の台座と牛の立ち位置とは近いので、聊か大ぼらを吹いてい

るような感じを免れません。僕たちは境内の裏庭をぶらぶらし、一軒の茶屋で茶と茶菓子を頂いた後に、山登りに行きました。山泉が依然として流れていて、泥の上の足跡はもう跡形もなくなっています。道傍に小さな桜の樹がありましたが、これはもう満開です。僕たちは最初梅の花と見間違っていました。寿昌兄が「この小さな桜の樹が僕たちを歓迎している、満開になっているのは僕たちのために花魁【梅花の別名】をやってくれてるんだよ」と言いました。僕たちが山頂まで近づくと、無数の白雲が見えてきました、大理石のような雲、乳玉のような雲が西の空の果てに激しく湧き上げています。寿昌に「ほらほら！あれはロダンの彫刻に似ていないかい？⁶」と言いますと、寿昌が大声で「おう、僕は分かったぞ、大自然はそもそも大芸術家だったんだ！」僕たちは、山頂まで上り、四方を一回り見渡してから、松林の草地の上で休憩しました。僕は李太白の詩「脱巾掛石壁、露頂洒松風」（巾を脱ぎ、石壁に掛け、頂を露わして、松風を洒ぐ）を思い出しました⁷。頗る禅の悟りに通じています。二人とも疲れて、体を横にして眠り、僕は夢さえ見ました。夢の中である人が僕に声をかけてきましたが、最後の言葉だけまだ覚えています。夢の中の人はこう尋ねたのです「もうコツが分かったかね？」。僕は突然驚いて目が覚めました。夢の中か、現実か、ぼんやりしていて、はっきりと区別できません。寿昌も丁度あくびをしているところでした。僕が「君も熟睡したのか？」と聞きますと、「熟睡しただけではなく、夢まで見たよ！」、「えっ、不思議だね！僕もみた。君はどんな夢だった？」寿昌は何も言いませんでした。松風がサーサーと吹いて、

¹ グイレ (Thomas Gray, 1716-1771) : 英国詩人。英語『Elegy Written in a Country Church Yard』は、郭沫若の訳としては『墓地の畔の挽歌』となる。1924年2月『創造』季刊の第2巻第2期に初めて発表し、後に1928年5月上海創造社版『沫若訳詩集』に所収。

² ドイツ語。胎生学。

³ 『春秋・公羊伝』魯哀公十四年に見える。

⁴ 劉向の『列仙伝』に見える。李耳、字は聃。春秋時代の楚国苦県（現、河南省鹿邑東）厲郷曲仁里の人。道家学派の創始人、また老子ともいう。

⁵ 『道德経』は、『道経』と『徳経』に上下2篇に分かれ、戦国時代の人が撰集したもので、老聃の言行録であると伝えられてきた。およそ5千文字である。

⁶ ロダン (Auguste Rodin, 1840-1917)、フランスの彫刻家、代表作には『考える人』、『カレーの市民モニュメント』と『バルザック記念像』等がある。

⁷ 李白の『夏日山中』に見える。

頭が軽くて空っぽになったようでした。寿昌が酒を飲みたいと言うので、二人で近くの茶店に行き酒を頼みまし。酒はありますが、肴がなく、ゆで卵に塩をつけて肴にしました。酒を飲みながら沢山のことを話しましたが、残念ながらもう覚えていません。別の道を選んで下山しますと、道端に一株の老梅がありました。寿昌が「一、二、三、四、五・・・」と咲く花の数を数えました。数えられるぐらいの花が咲いていたのです。僕はこう言いました。

「これこそ、まさしく 「・・・老梅、彼は、なお笑って花を咲かせているな」 だね」

それから『青い鳥』劇中の事象の謎解き【補注9】をやり、ずっと論議しながら麓まで戻りました。お互いにほろ酔い気分で、ゲーテとシラー【Schiller, 1759-1805、ドイツの詩人、劇作家】の銅像を鑄てあげたいねと言いました。神社の境内を出て、写真屋を探しに行きました¹。街の人に尋ねて見たら、境内にあると教えられ、また神社に入り、隅々まで探しましたが見つけれませんでした。互いによりかかり支え合って、梅花の樹の下をぐるぐる回りながら、思わず大声で詩を朗誦しました。

梅の花よ！ 梅の花！

ぼくはお前を賛える！お前を賛美する！

お前はお前の「自我」の中から、

清新で上品な香りを吐き出し、

しとやかで美しい花を咲かせている。

花よ！ 愛よ！

宇宙の精粹よ！

生命の源泉よ！

もし春に花がなく、

人生に愛がなければ、

一体どんな世界になるだろうか？

梅の花よ！梅の花！

お前を賛える！

ぼくは僕自身を賛える！

自我の表現たるこの全宇宙の本体を賛える！

それ以外にお前などあるか？

僕などあるか？

古人などあるか？

異郷の名勝などあるか？

すべての偶像は僕の前で壊れる！

壊れる！壊れる！壊れる！

僕は声帯が破れるまで歌う！

写真師！写真師！

ぼくらは君を探している！君を探しているのだ！

ゲーテもここにいる！

シラーもここにいる！

君が彼らの銅像を鑄る場所はどこだ？

僕の詩だ、君の詩だ、

それが僕たちの銅像、即ち宇宙の写真師！

彼に頼む必要はない、

自分を表現するだけのことだ！

行こう！行こう！行こう！

僕たちはもう一度陶醉しに行こう！

僕たちはまた登山の途中に立ち寄った茶店まで行きました。店の主人は、僕たちが写真を撮りたいと言うのを聞いて、すぐ急いで探して来てくれました。僕たちは写真を撮らざるを得ない羽目になりました。撮影の時、写真館の主人は、僕たちに一人は立って、一人は座ってと指示しましたが、僕たちがどうしても並んで撮ると言い張りましたので、「これでは銅像のように写ってしまう

¹ 写真師とは、日本で撮影師に対する称呼。

よ！」と言いました。僕たちは互い顔を見合わせて会心の笑みを浮かべただけでした。写真はまだ送って来ていませんが、届いたら必ず君にも一枚を差し上げますよ！

帰る時はすでに黄昏になっていました、二日市に戻る途中で寿昌が僕に言いました。

——— 実は、君はシラーに似ている。

——— どうして？

——— シラーも医学を勉強したことがあり、君も医学を勉強しているから。・・・

ただ君は別の角度からはまたゲーテとも似ているよ。

——— どういう角度？

——— 女性関係だね！

一日中我を忘れていた僕は、寿昌のこの一言でハッと目が覚めました。心中には言葉にできない苦しみしかありませんでした。僕は思いました。今後シラーをまねすることもなく、ゲーテをまねすることもしない。ただ自分の良心に忠実にやるだけだ。

昔の知識人は、剛日【十干のうちの甲・丙・戊・庚・壬の日を指す。】には経書【四書五経など儒教の経典】を読み、柔日【十干のうちの乙・丁・己・辛・癸の日を指す。】には史書【史記など歴史書】を読んだものですが、僕たちは剛日には山を読み、柔日には市を読みました。昨日は一日中、山を遊覧しました。今朝（二十四日）寿昌兄が起きて、午後には東京に戻りたいと言います。朝ご飯の後、急いで市の南にある西公園【補注 11】まで遊びに連れて行きました。公園は少し小高い位置にあり、博多湾を俯瞰することができます。この日は、少し風があり、湾は波浪が逆巻いていました。カモメも上下に舞い上がったり下がったり

していました。この素晴らしい景勝を絵に書きますと、湾は、池のような形で、真西にある陸地と島の間の狭い瀬戸だけが、外海と通じています。湾の北西の一带の陸続きの半島【補注 12】は、海の中道と言われています。海の中道の西端に一つの山が突起して、島の形をしているものがあり、志賀島と呼ばれます。百年余り前にこの島で一枚の金印が掘り出されました。印には「漢倭奴国王」と刻まれています。後漢の光武帝の時、倭人が来朝したことがあります。漢が来使の倭人を「倭奴国王」に封じたと『後漢書・光武本記』に見えます¹。この金印は今も残っており、現在は黒田侯爵家【旧福岡藩主】の宝物です。九州が日本の最南端にあり、古代の倭人たちが南洋群島から移動してきたことが充分に証明できます。

福岡市で近頃工業博覧会を開催中です【補注 13】。第一と第二の二つの会場に分かれています。第二会場は西公園の付近ですので、公園から出て第二会場に入り観覧してみました。会場の中は準備中で、設備などがまだ整っていません。会場の奥に人を怒らせる別館が幾つかあり、海岸に沿って建てられていました。一つは、「朝鮮館」、その次は「台湾館」です。館内の半分は展示場で、半分は茶店です。茶店にはわざわざ台湾の女性同胞を雇っていますが、十三、四歳ぐらいで、十数人が下女【ウィトレス】として働いているのです。それを見て、僕はただ秘かに酸っぱい涙を飲みこむしかありませんでした。寿昌はもうこれ以上見てられないと言いました【補注 14】。最も憎いの

¹ 光武、即ち劉秀（前6-57）、字、文叔。南陽蔡陽（今、湖北棗陽西南）の人である。後漢の創立者で、公元25-57年に在位。『後漢書・光武帝記』に「中元二年（公元57）春正月、「東夷倭奴国王遣使奉獻」【東夷の倭にある奴国王が使者を遣わす、貢物を献上した】」とある。

は、さらに「満蒙館」¹まで設けてあることです。満蒙は、朝鮮、台湾と同じようになったのでしょうか【補注 15】？どうせなら、なぜ更に「曹家館」、「段家館」など²を建設しないのでしょうか？

博多湾中の海水を ink³に作って、福田徳三⁴ら同類の博士先生たち【補注 16】に依頼し、日本人は和平を愛する国民であり、日本人が侵略の野心などを持たない国民であるといった類の大文章を書いてもらったとして、たとえもっともらしく書いたとしても、これらの朝鮮館をどう説明するのでしょうか？また台湾館はどうでしょう？満蒙館はどうでしょう？満蒙館は！事柄は小さいでしょうが、僕は国家の体面を頗る損なっていると思います。君は、公使館へ報告し、彼らに撤去を要求する必要があると思いませんか？僕たちは日本に留学していますが、読んで【＝学んで】いるのは、西洋の本【＝学問】、受けているものは、東洋【日本を指す】のいじめです。僕は本当に不運で、ついていないと思います！近頃、発奮したい、飛び出したい、西洋へ逃げ出したいと、とても思います。しかし僕はお金がありません、僕は自由ではないのです、ああ！・・・・・・白華兄、僕はもう一つの胸の底に思うことをお話したい。僕はとても医学を棄て、文学を専攻したいのです。君は賛成してくれるでしょうか？君の最近の手紙はもう受け取りました。この一、二年のうちに、ヨーロッパへ行くことができるんですね、僕は本当に羨ましい。寿昌兄も近いうちにアメリカへ行くと言っています。君たちは皆すばらしい。

¹ 当時の中国東北三省と内蒙古を指す。

² 曹とは、曹汝霖をさす。段とは、段祺瑞を指す。両者とも当時の北洋軍閥政府の中の親日派である。

³ 英語：墨汁。

⁴ 福田徳三（1874-1930）、日本経済学者、1905年に法学の博士号を獲得した。

ただ僕ひとりが、・・・・・・ああ！もうこれ以上言いますまい！

僕たちは、第二会場を観覧した後に、今度は第一会場へも行きました。時間はもう晩くなってしまいました。寿昌は8時20分の汽車で東京に帰って行きました。

僕は、今後、もう読書に専念する努力をしない、人になる努力を大いにしようと思う。

僕は、以前の静的な生活を、動的な生活に改めなければならないと思う。

これは、僕の頭の中に残っている寿昌兄の言った最後の言葉です。寿昌が去って、もう6日になります。僕もいまもう春休み中です。君は僕たちの喋ったつまらない話しを書くようにと言いましたが、いったん書き出すとこんな長編になってしまいました。君には原稿を読む精力を無駄に使わせることになりました。どうぞお許し下さい。鶏が恐らくまもなくまた時を告げることでしょう。僕は眠らなければいけません。ではまた。

沫 若 九、三、三【補注 17】

【民国9年、大正九年、1920年】

*本文中、訳注の必要な語には【 】内に記した。また、背景などより詳しい説明の必要な語は【補注】を補った。

*郭沫若文中の難解な中国語の語彙と表現について、熊本学園大学・石汝傑教授のご示教を賜った。ここでご厚意に感謝申し上げます。

【補注】

1 福岡から大宰府天満宮に参拝するには、今は西日本鉄道を使うのが一般的だが、当時は未開通（開通は1924年）だったから、博多駅、または吉塚駅から鹿児島本線に乗り、二日市駅で下車、その後は軽便鉄道、人力車、徒歩などで大宰府に行くのが普通だった。鉄道院公認時刻表『公認汽車汽船旅行案内』旅行案内社刊によれば、博多から二日市までは平均して普通列車で約30分かかっている。参照した大正9年3月1日改正のこの時刻表では、郭沫若が書いているような時刻に適合する列車は見つけ出せない。一番近いもので、吉塚駅10時41分発人吉行があるが、この列車は雑餉隈駅を11時4分に出ることになっていて、郭沫若が切符を拾って駅に帰った時、時計が11時を打った、そのとき電車はもう動き出していた、という記述と合わない。また次の列車は11時09分に雑餉隈を発車するから、次は1時半という記述にもあわない。

2 「立体派」（キュビズム、立体主義）は1907、8年ごろピカソらによって始められた芸術運動。その内容については様々な説明がなされているが、要は芸術活動の対象となる外界のあらゆる事物を幾何学的形態（円形、球、円錐など）に細分化し、解体（還元）し、画面に表現する表現様式。やがて、従来の単一の視点による遠近法を放棄し、対象を多元的な視点から再構成、統合して表現する方向に進んだ。

立体派の芸術の日本への紹介については、A. グレイツェス・J. メッツインガー（蘇武緑郎訳）「キュビズム」、向陵社、1915年、木村荘八『未来派及立体派の芸術』（近代思潮叢書第4編）、天弦堂、1915年、などの書物があり、論文には、森野亀之輔「泰西画界新運動の経過及びキュビズム—附其批評」、『美術新報』14巻3-5、7、10、11号、1915年3-5、7、10、11月などが、国会図書館の蔵書目録から検索できる。郭沫若が、これらの文献に目を

通していたかどうかは不明だが、彼がここで引いているマックス・ウェーバーの詩 The Eye Moment は、松浦一『文学の本質』（大日本図書、1915年）に一部翻訳紹介されている。（池田誠「中原中也とダダ」『武蔵大学人文学会雑誌』36巻3号、2005年1月、による）松浦一は東京帝大英文科出身で、卒業後講師を務め文学概論を講じた。芥川龍之介などがその講義を聴講している。『文学の本質』はその当時の著書である。

マックス・ウェーバーはロシア生まれのアメリカ立体派詩人。1914年最初の詩集『立体派の詩』

（Cubist Poems [London: E. Mathews, 1914]）

を刊行した。72頁の小冊子で、郭沫若が引いている「The Eye Moment」が冒頭におかれている。この詩集は当時の新興芸術への高い関心を背景に、出版後すぐ日本に輸入され、読まれたのではあるまいか。郭沫若もこのときにはこの詩集を読み、冒頭の詩を暗唱していたのである。民衆派詩人として知られる白鳥省吾（1890—1973）は1915年7月マックス・ウェーバーの詩を論じた評論「立体派の詩」を雑誌『詩歌』（不詳）に発表している。白鳥は、この前後ホイットマンを精力的に紹介しているから、郭沫若もあるいはその名を知り、彼を通じてウェーバーや「立体派の詩」への関心を深めた可能性もある。また、同時期に未来派の紹介者だった神原泰（1899—1998）の詩「自動車の力動」（『新潮』1917年10月号）は「後期立体派」という副題をもつ（池田誠、前掲論文）、明らかにウェーバーの「瞬間」の影響を受けた作品である。また、このように、大正初期の日本では立体派を含む未来派の前衛芸術（アヴァンギャルド）が紹介され、受容が進みつつあった。やや遅れて1924年には篠崎初太郎によってウェーバー詩集の全訳『立体派の詩』（異端社刊）が出ている。郭沫若も日本芸術界のこういう潮流の中で立体派に興味をいだいたと思われる。だが、彼は日本における未来派や立体派を紹介した文献や作品については

一切語っていない。この点については今後の研究課題というほかない。

3 『ファウスト』第2部第1幕冒頭の題名である。愛するマルガレーテを失ったファウストがその傷心を癒やす場面である。高橋義孝訳『ファウスト(二)』(新潮文庫)では「優雅な土地」と訳されている。ファウストは妖精たちが漂い動く、花咲く草地(「優雅な土地」)に身を横たえているが、やがて朝日の響きで目覚める。太陽の強烈な光に背を向けた彼は「岩礁を縫って滾り落ちる滝」を目にし「なんともいわれぬ恍惚感が高まる」。第一幕はファウストの次のようなセリフで幕を閉じる。「滝は流れ落ち、滾り落ちて、幾千とも知れぬ／流れを作り出しては／空中高く水しぶきを揚げてどよめく。／この流れから生まれ出て、孤を描いて空中に懸かる／色どりも千変万化の虹の橋の、／ある時は鮮やかに、またある時は空に消えて、／あたり匂やかな涼しい霧を撒き散らす有様はなんとすばらしいではないか。／虹は人間の営為を映し出す鏡だ。／虹を見れば、人生とは色とりどりの影にすぎぬということが、／よくよく納得できるはずだ。」(高橋義孝訳による)

なお、3月20日の『時事新報・学灯』には郭沫若に寄る訳文「風光明媚の地方—〈浮士徳〉悲壯劇中第二部之第一幕」が掲載されている。

4 スイスの中央に位置する湖、ルツェルン湖(英語:Lake Lucerne、ドイツ語:Vierwaldstättersee)。ゲーテはこの湖畔で「湖上にて」という詩を書き、シューベルトがそれに曲をつけている。

5 二日市から大宰府には1903年3月馬車鉄道が開通。14、5人乗りの車両を馬が引きレールの上を走った。1916年にはこれが蒸気で走る軽便鉄道(ポッポ軌道)となった。運賃は11銭だった。(大宰府市史編纂委員会『大宰府市史(民俗資料編)』平成5年4月、太宰府市発行、632頁、による)。ここでいう軽便鉄道はこれを指す。だが、それ以外の交通手段として、人力車(運賃30銭)のあったことは記さ

れているが、摩托车(オートバイ)があったという記事はまだ見つけていない。注釈者としては、郭沫若のこの記述に疑義をもっている。

6 以下は、郭沫若による中国語訳(1節が5言6句から成る定型詩で全21節で構成)を訓読し、その後に訓読に基づく現代語訳を付した。アルヴィ宮本なほ子編『対訳 シェリー詩集 イギリス詩人選(9)』岩波文庫、2013年1月、も参考にしたが、あくまでも郭沫若による訳を基本にしている。またこの訳詩は、修正を経て「雲鳥曲」の名で『創造季刊』第1巻第4期(1923年2月)に掲載され、1928年3月創造社出版部から『雪萊詩選』として出版された。

7 1883年刊の『新体詩抄』に谷田部尚今訳「グレー氏墳上感慨の詩」と題して収められている。その最初の聯の訳文は以下の通り。「山々かすみいりあひの 鐘ハなりつゝ野の牛ハ／徐に歩み帰り行く 耕へす人もうちつかれ／やうやく去りて余ひとりたそがれ時に残りけり／四方を望めバタ暮の 景色ハいとゞ物寂し／唯この時に聞ゆるハ 飛び来る虫の羽の音／遠き牧場のねやにつく 羊の鈴の鳴る響」。郭沫若もまた葛雷「墓畔哀歌」の題で訳しており『郭沫若訳詩集』(創造社世界名著選第10種)創造社出版部、1928年5月、に掲載されている。

8 「登臨」は1920年2月25日付けの郭沫若から田漢宛の書簡(『三葉集』所収)の冒頭におかれている。題名はないが「独游大宰府」の時に作ったと言っており、これが詩の別名にもなっている。また大宰府に行ったのは「先月の末」だった、と書いている。20年1月末の作ということになるが、陳永志『《女神》校釈』華東師範大学出版社、2008年、は根拠を明示せず1919年12月25日の作とする。

9 メーテルリンクの戯曲「青い鳥」は、チルチル、ミチルの兄妹が夢の中で妖女に頼まれて「青い鳥」を探す物語。堀口大學の要約によれば、そのストーリーは次のようである。『思い出の国』で青い

鳥を見つけますが、これは籠に入れるとたちまち黒い鳥に変わってしまいます。子供たちはなおも『夜の御殿』、『森』の中、『墓地』と歩きまわり、色々とかわい思いや難儀をします。『森』の中には青い鳥の姿はありましたが、とれませんでした。『夜の御殿』でとったのは死んでしまいました。最後にたどりついた『未来の王国』でとったのは赤くなっていました。さがす青い鳥は手に入らないまま、こうした旅のうちに一年が過ぎてしまいました。妖女との約束は果たせませんでした。二人は家へ帰ることにします。ここで子供たちの夢がさめます。そこへ隣のおばさんが来て、自分の病気の娘がチルチルの飼っている鳥を欲しがっていると告げます。忘れていた自分たちの鳥を見ると、驚いたことに青い鳥に変わっています。〈ぼくたち随分遠くまで行ったけど、青い鳥ここにいたんだな、これがぼくたちさんざんさがし回った青い鳥なんだ〉と気づきます。これを隣の娘にやると、病気がよくなり、娘が礼に来ます。ところが二人で餌をやりようとしていると青い鳥は逃げてしまいます。これでこの芝居の筋は終わっています」（堀口大學訳・メーテルリンク『青い鳥』あとがき、新潮文庫、1997年11月改訂版）。堀口は「万人のあこがれる幸福は、遠いところにさがしても無駄、むしろそれはてんでの日常生活のなかにこそさがすべきだというのがこの芝居の教訓になっているわけです。夢さながらの美しい舞台で、詩のようになだらかで詩のように意味深い言葉で作者はこれを語っています。」という文で「あとがき」を終えている。この戯曲のテーマは堀口の言うようなものとして理解されてきたと思うが、実際には人間の生きる意味とは何か、幸福とは何か、存在の実相とはなにかなど、様々な問題をつきつける作品である。

劇はチルチル、ミチルが出会い、目にするすべてのもの、時間や光や、抽象的な「幸福」のようなもののまでが、擬人化されて舞台上に登場する。その総数は100を超える、破天荒な芝居である。後述するよ

うにこの劇が上演されたのは1920年2月だが、この上演を田漢は見ていた。2月29日付郭沫若宛て手紙に田漢は以下のように書いている。

「沫若君！僕は本当に幸せです。ネオ・ロマンチック ドラマを『沈鐘』以外に、この新劇の沈滞した日本で最近もう一本『青い鳥』Blue Bird を見たのです。『青い鳥』はMa terlinck の最も歓迎されているシナリオであること、言うまでもなく、英、仏、ロシア、アメリカのどの国でも翻訳され、上演されています。日本でも翻訳はされましたが一僕は2種類の日本語訳を見たことがあります—上演はこれが初めてです！（中略）この劇は民衆座が2月11日から17日まで有楽座で上演し、僕は16日の夜見に行ったのです。この劇のシナリオは以前英訳をざっと見たことがありますが、どうも演劇らしい味わいを感じませんでした。更にパン、火、犬、猫、ミルク、白楊、ウサギ、柳、時間、星、露、……どれもこれも擬人化されていて、本当にどう演出すればいいかわかりませんでした。しかしこの夜は、本当に見識が広まり、気分が高まり、いろいろな考えが浮かびました。まったく君たちに来てもらって一緒に見たかったです！」（『三葉集』全集第15巻、93-94頁）田漢のこの感動は、博多に来た時もまだ残っていたであろう。「謎解き」とは、この劇のテーマや作劇術等についての議論をさすもののように思う。なお、この時期の田漢の日本演劇への親炙については小谷一郎「田漢と日本（一）—「近代」との出会い」埼玉大学大学院文学研究科紀要『日本アジア研究』創刊号、2004年3月、87-103頁、に詳しい。

榊原貴教「メーテルリンク翻訳作品年表—明治35年～昭和17年」（『翻訳と歴史—文学・社会・書誌』第16号、ナダ出版センター、2003年7月、ただしこの記述はインターネットに公開された「メーテルリンク翻訳作品年表」に基づく）によれば「メーテルリンクは明治35年から昭和初期まで、日本の文壇・劇壇を風靡した。そしてストリンドベリと同じ

く、その後は火が消えたように忘れさられた文学者である。ただストリンドベリと異なるのは、昭和20年以降も、幸福の代名詞のようになった『青い鳥』が児童文学関係者によって繰り返し物語化され、また児童劇として上演されてその虚名を留めていることだろう」という。「青い鳥」は1908年に発表され一躍大評判となり、1911年メーテルリンクはノーベル賞を受賞する。榊原氏の年表によれば「青い鳥」は1910年にすでに翻訳紹介されているが、単行本として出版されたのは1911年8月島田元麿・東草水訳『青い鳥』が実業之日本社から出たのが最初のものである。1913年12月若月紫蘭訳『青い鳥』上・下（近代脚本叢書10・11）現代社（若月訳は翌14年9月、世界文芸叢書7巻として文芸社から、15年4月には薔薇叢書2として植竹書院から出版）、そして1920年3月楠山正雄（1884—1950）の訳が『近代劇選集1』新潮社、に入った。演劇『青い鳥』が日本で最初に上演されたのはこの年2月、新劇協会により有楽座で演じられた。チルチルを水谷八重子、ミチルを夏川静江が演じた。その脚本にはこの楠山訳が用いられた（早稲田大学演劇博物館編『日本演劇史年表』八木書店、1996年10月）。

10 「登臨」には「悲鳴を上げる鳩」と「銅の馬」が書かれている。「今日は一羽も」や「銅馬のほかにも」というのは、『登臨』にはそう書いたが……」という気分が込められているだろう。

11 西公園は福岡市全体から言えば、北の方角、博多湾に接する小山の上にあるとするのが正しいと思う。郭沫若が「市の南」と書いているのは間違い。郭沫若が西公園を「南」と認識したのは、彼が福岡市の東端にある箱崎に住んでいたことと関係あるかもしれない。

12 原文は「土股」。『増訂華英通語』（万延元1860年刊）によると、地理類のpeninsulaが「土股」と訳され、「ハンジマ」（「半島」の意）と振り仮名がふられている。郭沫若は志賀島を「peninsula（半島）」

と考えていたようだが、志賀島は砂州である海の中道によって九州の本島とつながれた島という意識が地元の住民には濃いように思う。『増訂華英通語』は日本で出版された英語の単語集として早い存在であり、福沢諭吉の最初の出版物とされる。原本は清・子卿著『華英通語』（咸豊5 1855年、サンフランシスコ刊行）という英華対訳の単語集である。福沢が万延元年（1860年）に咸臨丸で始めてアメリカに渡った時、恐らく同地で買い求め、帰国後、これに英語の発音と華語の訳語の日本読みを片仮名でつけ、「増訂」の二字を冠して出版したものである。郭沫若が「土股」という言葉を知って使っているのは、恐らく当時通用している英華辞書を活用していたからであろう。これは当時の中国と日本が英語（広く西洋）を如何に受容したかを示す興味深い事例になる。

13 大正期には福岡で大きな共進会や博覧会が2つ開かれている。その一つは九州沖縄勸業共進会（1915年4月～5月）、もう一つが工業博覧会（1920年3月～5月）だった。郭沫若が見た工業博覧会は3月20日に正式に開幕、5月20日閉幕した日本最大の工業博覧会だった。入場者総数は91万人（『福岡日日新聞』5月20日）を数えた。九州電気協会、化学工業協会の共催で、福岡市も2万円を補助した。開幕当日の新聞（九州日報）は「全国未曾有の工業博覧会は開かる／玄海の蒼波と相映発する大建築物／事毎電気応用の大仕掛け／巍峨たり、又燦爛たる出品三万余点／経費を投ずる実に百万円」との見出しを掲げて次のように報じた。「総坪数約三万坪、須崎裏町第一会場二万坪、福岡築港埋立地約一万坪、昨年十月工を起して殆ど半歳、経費約百十万円…（以下文中の…は引用者による省略を示す）。第一第二会場を通じて大小建物約百余棟、工業博だけに電気の利用は頗る徹底的で…これを普通電力電燈とすると全福岡市の三分の一に供給することができる。出品点数約二万点、この外満蒙、

朝鮮、台湾等の各植民地館、…その他の特別出品を
通算すれば三万点。（以上、福岡市役所編集・発行
『福岡市史』第2巻大正編、1963年10月刊、767
頁）

14 郭沫若が問題にしているのは第2会場の満
蒙館、朝鮮館、台湾館だった。彼が憤慨したのはこ
れらの展示館を「植民地館」と伝えるような日本社
会の差別意識、その底流に存在する宗主国日本＝優
秀、植民地＝劣等という、日本人の傲慢な優越意識、
それを裏返しにした被植民民族への蔑視意識だっ
た。例えば、大阪朝日新聞は第2会場について「植
民地気分の第二会場 福岡築港埋立地」との見出し
の下に、次のように伝えていた。

「植民地気分の第二会場 福岡築港埋立地／第二会
場は嘗て陸軍大演習の際餐宴場に充てられた福岡
築港埋立地で第一会場からゴンドラ船で行けば僅
か三分ほか要らぬ此所には朝鮮、台湾、満蒙館など
あって帝国の新勢力下ある産物を蒐め殊に台湾館
では十名ばかりの台湾美人が烏龍茶を煎じて喫ま
せるし満蒙館では階上に於て満蒙地方の開発に就
いて講釈をして植民地気分をタップリと味わせよ
うとする」（『大阪朝日新聞』1920年3月20日＝
神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ[新聞記事
文庫]www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/による）

また「福岡日日新聞」は開幕半月後の第2会場に
ついてこう書いている。

「蒙、台湾、朝鮮の三館は特産品の陳列あるより一
般の注目を惹き居れり又次に同会場参考館にては
新領土たる南洋マーシャル、カロリン嶋より同嶋製
産品を出品することとなり既に出品物は門司に到
着し居れるを以て近日到着陳列さるる由重なる出
陳物はコブラ、果実、椰子実細工、砂糖、モクモク、
苺等四十六種なりと尚第二会場余興館にては大怪
力ボルネ兄弟の怪技並に文字美術を解する名馬モ
ザートは開演以来非常の好評を博し十二名の巨漢
を載せたる天秤棒を一人にて差上げ或は数十貫の

大鉄丸を毬の如く翻弄するなど無敵の怪力振を発
揮し名馬は右の外ピアノを連弾し連日喝采を博し
居れり」（『福岡日日新聞』1920年4月7日＝神戸
大学附属図書館同上）

いわば第2会場は日本人の差別意識（「植民地気
分」）が充満し、しかもそれを満足させる場であっ
た。「十名ばかりの台湾美人が烏龍茶を煎じて喫ま
せる」台湾館は、郭たちにはそれを顕在化する装置
として意識されたと言っていいだろう。

15 1915年のいわゆる「対華21カ条要求」の
第2号で日本政府は袁世凱政権に「南満州及び東部
内蒙古」の経済的利権を要求し、5月9日袁政権は
それを受諾した。しかし朝鮮、台湾と違って「満蒙」
は日本の植民地になったわけではなかった。郭沫若
が「満蒙館はどうでしょう？満蒙館は！事柄は小さ
いでしょうが、僕は国家の体面を頗る損なっている
と思います。君は、公使館へ報告し、彼らに撤去を
要求する必要があると思いませんか？」と書してい
るのは、外交上の法理に反するではないか、という
憤りよりも、れっきとした中国領土である「満蒙」
をあたかも日本の植民地であるかのように扱う日
本社会の雰囲気へのいらだちを示しているのでは
あるまいか。

16 福田徳三（1874 - 1930）は、経済学者。東
京高等商業学校卒業後、ドイツに留学、帰国後母校
の教授となったが、1904年当時の校長と衝突して
辞職。慶応義塾大教員となったが、母校に復帰、1919
年教授、20年母校が東京商科大学（現在の一橋大
学）となった。1918年吉野作造らと言論団体・黎
明会を組織して「民本主義」を宣伝し、大正デモク
ラシーの一翼を担った大正論壇の有力な言論人だ
る。郭沫若がここで批判しているのは、大日本帝
国が実質的にアジアに対する侵略を強め、台湾、朝
鮮を植民地化し、いままた満蒙への経済侵略（対華
21カ条要求）を開始しようとする現実を目をふさ
ぎ、日本を平和国家のように描き出す言論人だった。

郭沫若が念頭においている具体的な文章は明らかでない。しかし、福田は1919年8月の講演で以下のように述べていた。

英米独などは大いなる領土、富、強大な権力を持ちそれを誇りとしているが、日本はそれを持たない。だが日本には「持っていない」ことを世界に誇るものがある。それはなにか。世界各国を見るに、自国の領土、富、権力を更に増大さすべく侵略しつつある国と、それを防ごうとする国の2種類に分かれ中間のものは殆どない。だが、日本は今後はいざ知らず「今日までの所世界の上に立って侵略の念を抱いたことは未だ嘗てない。『日本の国本【国家の根本原理の意か】として世界に誇るべきものの一は侵略意思がないと言ふ事である。他国に於いて見る如く、富、権力を以て世界に誇り又之を利用して他国を侵略すると言ふ事は或る意味に於て幸であるかも知れぬが或る意味に於いては不幸である。日本は斯様な事は出来ない、出来得ないのである。』」（『虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ』原載『黎明講演集』第5集、1919年7月号。太田雅夫編『資料大正デモクラシー論争史（下）』新泉社、1971年4月、461 - 462頁）

これを「日本人は和平を愛する国民であり、日本人が侵略の野心などを持たない国民であるといった類の大文章」とは言えないが、引用した福田の文の底流にあるのが、これに極めて近い発想であることが分かる。

17 手紙は田漢の来訪について宗白華に報告したもの。田漢は3月19日に来て、3月24日に東京に帰っている。「田漢が去ってもう6日になります」とあることなども考えると、これは3月30日の誤りである。原資料の手紙の○が、小さくて不注意で3日としたのであろう。

解説：本文の翻訳について（岩佐 昌暲）

前回の続き。東京から訪ねて来た田漢との交流を宗白華に報告する手紙である。ここでは、郭沫若と田漢が太宰府に行ったのは一体いつなのか、というやや瑣末な問題を考えてみたい。郭沫若の手紙の中では、3月23日と書かれているのだが、後述するように、この日付を22日だとする見解があり、龔継民、方仁念『郭沫若年譜』などはそれを基に、太宰府に行った日を3月22日としている。また、これに連動して郭が太宰府で読んだ「梅花樹下醉歌」の制作日時はいつか、ということも問題になる。

この問題を考える前提として、まず手紙に見える彼らの行動を日付順に整理しておきたい。

3月19日

アンナは産後わずか3日で床に伏せっており、郭沫若が昼食の支度をしていたところに、田漢が訪ねてきた。昼食後、息子の和夫と一緒に田漢を連れて箱崎海岸を散歩する。そのとき、彼は田漢に博多湾に襲来した元軍が一夜のうちに全滅した話をして聞かせる。その話しは郭沫若が博多に来たばかりの時に、この海岸で聞いたものだった。一人の教員（原文「教習」）が小学生の集団に対し身振り手振りでその話をしていたのだという。そばで聞いていた郭沫若は「限りない敵愾心」を呼び起された。こういう思いつ話をしながら、二人は医学部（原文は「医科大学」）を通り抜けて東公園に行く。この日の上海『時事新報・学灯』には「光海」が掲載されたが郭はもちろんまだ知らない。

3月20日（晴れ）

田漢はかなり遅くまで寝ていた。朝食後、郭はお湯を沸かし赤ん坊を風呂に入れたりしている。田漢は2階で手紙（『三葉集』の原稿だろうか）の整理をし、また数日前に届いた『少年中国』（詩学号）[2月15日発行の第8期であろう]を繰り返し読んでいた。彼の「詩人と労働問題」が掲載されていたか

らである。午後は二人でファウスト第1部を読む。彼らが議論した個所は郭沫若がすでに翻訳をすませ、『学灯』に送ったところである。その訳文は丁度この日の『学灯』に掲載されていたが（本稿補注3）、もちろん二人はまだ知らない。なお、『少年中国』第9期[3月15日発行]にはshokana 著・田漢訳「歌徳詩中所表現的思想」と郭沫若の『歌徳詩中所表現的思想』附白が掲載され、田漢の訳文のゲーテ詩は、すべて郭沫若の訳だった（本紀要前号40頁、補注7）。夜、松原を散歩。郭沫若が「結婚後も恋愛を保持できるか」と言いだし、それについて議論。最後に松井須磨子の自殺などについて話す。

3月21日（晴れ）

天気はよかったが、郭沫若が具合が悪く、午前中は家でハイネの詩を読む。郭沫若は二年前に彼の詩を訳していた。田漢は、いっしょにハイネを中国に紹介しようと持ちかけるが、郭沫若は断っている。

「淫猥を教える作品」と誤解する者が出るのを恐れるからだ、と彼は言う。

午後、海岸の砂浜に座って話す。田漢は女性の3人称を表す漢字「她」は不平等だと主張。男は人偏（にんべん）に「也」なのに、女の場合はなぜ女偏に「也」なのか、女は「人」ではないのかという理屈。これは、当時の中国の「女権主義者」たちが言っていたのと同じ主張。田漢は「彼」を表すのに「力」＋「也」にすればいいという。「男」から「田」を省くわけである。その後、近くの銭湯に行き入浴。

3月22日（雨）

田漢、『三葉集』の原稿（手紙）の整理を終え、名前をつけてくれと郭沫若に頼む。田漢はテーブルの上に置いてあったドイツ語版「若きウェルテルの悩み」を見て、直ちに序文を書く。

3月23日

田漢と汽車で大宰府に行く。途中、雑餉隈で窓から切符を落とし、探しに車を降り、発車した列車に乗れないまま駅に取り残されてしまう。そのまま徒

歩で二日市に向かい、田漢と出会う太宰府参拝を果たす。田漢が宗白華に「昨日郭沫若と太宰府に行きました。梅の花を見、写真を撮り、歌を歌いました。二日市から歩いて行き、歩いて帰ったのですが、いやもう面白かった」と書き送った通りである。太宰府天満宮では彼ら茶店でお茶を飲んだ後、は宮の背後の小山に登り、昼寝をし、山腹の茶店で酒を飲んだりしている。その勢いで詠んだのが今回の手紙に書きとめられた詩（発表時の題名は「梅花樹下醉歌—偕田寿昌兄再游太宰府」）である。この詩はこの年8月刊行の『女神』に収められているが、『女神』収録時には「写真師！写真師！」以下の11行は削除されている。

この後、山を下りた二人は、最初の茶店に立ち寄り、店の主人に写真屋を探してもらい、写真を撮ってもらう。帰途についたときは、もう黄昏時だった。

3月24日

朝、田漢が午後には東京に帰らなければと言いつつ。朝食後、西公園に行き、博多湾、海の中道、志賀島などを眺めたのち、丁度開催中（3月20日に開幕したばかりだった）の福岡工業博覧会を見に行く。西公園の下が第2会場であり、そこには台湾館、朝鮮館、満蒙館などがあつた。台湾館は半分が茶店で台湾から連れてこられた十三、四の少女たちが給仕として働いており、二人の憤激をよび起こす。会場を出た二人は須崎裏のメイン会場も参観。空はすでに暗くなっていた。田漢は夜8時20分の汽車で東京に帰って行った。

以上が、郭沫若が宗白華に報告した田漢との6日間である。ところが、この手紙は、これを資料に『郭沫若年譜』や「郭沫若著訳纂年」などを編もうとすると、やっかいな問題が出て来る。やっかいな問題というのは、田漢もまた宗白華宛に博多行きを報告する手紙を書いていて、同じく『三葉集』に収載されているのだが、二つの手紙の内容に若干の齟齬が

あるのである。

齟齬は、太宰府行の日付をめぐってである。上に整理したように、郭沫若の手紙では太宰府行は3月23日である。ところが、その23日の日付で田漢は宗白華宛にこう書いている。

「昨日郭沫若と太宰府に行きました。」「今日の午後4時19分の汽車で東京に帰るつもりです」

この日付通りであれば、昨日は3月22日ということになる。だが、郭沫若は22日には雨で田漢は『三葉集』の原稿整理をして、その序文を書いた、と記している。『三葉集』には3人の序文があるが、日付はない。ただかなり短いもので、彼らの文才を以てすれば書きあげるのにそれほど手間はかからなかっただろう。だから22日朝、序文を書きあげてから汽車で太宰府に行くことは可能である。だが、特に決まった旅程などない田漢を、雨の日にわざわざ太宰府に連れて行くだろうか、時間はいくらでもあるのに、出発前の慌ただしい時間を割いて、序文を書きあげる必要があるだろうか、などと考えると、この日付は何かの間違い（例えば、田漢がこの日を23日と思いこんでいた、という風な）と考える方がいように思う。

こういう「些事」にこだわる理由は二つある。1つは前述したように、龔繼民、方仁念『郭沫若年譜』（上・中・下）天津人民出版社、1982年10月、が太宰府行を3月22日としている（上巻、81～82頁）ため、2つ目はそれに伴って、当然ながら「梅花樹下醉歌」も3月22日作とされていて（上海図書館編注「郭沫若繫年目錄解放前部分」『中国当代文学研究資料・郭沫若專集（2）』四川人民出版社、1984年8月、28頁、また中国社会科学院文学研究所総纂「中国文学史資料全編」現代巻36『郭沫若研究資料（下）』所収「郭沫若著訳繫年」知識産権出版社、2010年3月、1203頁、もこの見解を踏襲）、それが文学史の事実になっていることに何やら割り切れぬものを感じるからである。割り切れぬものと

いうのは、年譜の作者が、太宰府行きの日付を確定するために『三葉集』の記事を十分に吟味したとは思えないこと、「繫年目錄」の記述も、田漢は22日と言いい、郭沫若は23日と書いているとした上で、「二人の当事者の異なる記載によれば、この詩は1920年3月22日に書かれたとも、23日に書かれたとも言える」という曖昧な書き方をしていることによる。

筆者は、この問題については郭沫若の手紙を基本資料とすべきだと考える。郭沫若の手紙には田漢が来訪して博多を離れるまでの行動が、毎日書かれている。20日、21日、23日、24日については午前、午後、時には夜まで何をしたかが書かれている。問題は22日だが、この日は雨で田漢は『三葉集』出版のため原稿を整理し終えたこと、彼が机の上に置かれた「若きウェルテルの悩み」を見て、『三葉集』を「若きウェルテルの悩み」に擬えるような序文を書いたこと、それを「僭越」と感じたことなどが書かれている。もちろんこの日に太宰府に行った可能性がないわけではない。しかし、これも上に述べたようにわざわざ雨の日に行くというのも不自然である。

23日太宰府行きの記事には「今日天気甚好」と書かれる。雨だった昨日と打って変わって、という気分が込められていると筆者は読んだ。

最終24日の記事には「昨日は一日山に遊んだ。今朝（24）寿昌兄が起きがけに「午後東京に帰る」と言った、とある。実際には、田漢は夜8時20分発の夜行に乗って帰京するわけだが、23日の日付になっている問題の手紙には「今日の午後4時19分の汽車で東京に帰るつもりです」とあり、このことから逆に田漢がこの日（24日）を23日と間違っていたことが示せるように思う。

以上のようなことから、筆者は、二人の太宰府行きは3月23日、「梅花樹下醉歌」が生まれたのも3月23日と考えるのである。

ならば、田漢の宗白華宛手紙の日付をどう解釈すればいいのか。私の推測をまとめれば以下になる。田漢は23日郭沫若と太宰府に詣で、24日午後の列車で東京に帰るつもりであった。そして、そのような手紙を宗白華に出した。その時、彼は日付を書き間違え23日としてしまった。手紙を出した後、郭沫若と西公園に行き、帰りに工業展覧会を見た結果、午後の列車に乗れず（あるいは乗らず）、夜行で東京に帰ったのである。田漢の手紙の内容を事実とみると、郭沫若が書いている24日の西公園行きと工業展覧会参観を、どこか別の日に嵌めこむ必要が出て来るが、この手紙の内容からは、それがどの日のことかを確定する手掛かりはない。すべては、田漢が24日を23日と書き間違えたと解釈することで解決するのである。

この問題については、実は『女神』の研究者である陳永志にも考証がある。「一日之辨—《梅花樹下醉歌》写于哪一天」(『《女神》校釈』華東師範大学出版社、2008年9月、254-255頁)がそれである。陳氏は「梅花樹下醉歌」の作詩日を確定したいという問題意識から、郭沫若の手紙の信ぴょう性について考察を行なっている。陳氏が着目したのは、郭沫若の手紙が一気に書かれたのではなく、何回かに分けて、その日、あるいは前日の出来事を思い出しながらかかれているということである。問題になっている22日は、その日のことを振り返ったあと「ここまで書いたときに鶏が鳴きました。明日また続きを書きます」(前号38頁)としている。そして、24日には「昨日は一日中、山を遊覧しました。今朝(二十四日)寿昌兄が起きて、午後には東京に戻りたいと言います」とあり、手紙の末尾には「寿昌が去って、もう6日になります。」とある。その日付は3月30日である。こうした記述の仕方から陳氏は「22日、23日、24日の三日間の会話や行動は、郭沫若がその日に書き、30日の深夜手紙を書いたときに整理してまとめたのである。以上によって、この《梅

花樹下醉歌》は1920年3月23日に書かれたとすべきである」と結論付ける。そして、田漢の手紙を根拠にこの詩が22日に書かれたとする説には「このような推論は、郭沫若の手紙を詳しく見てもおらず、2通の手紙の内容のいずれが正しいかに対し、正確な判断もしていない」としてこれを退けている。明言してはいないが、私と同じく23日の日付は田漢の勘違いという見方をしておられるものと判断する。

陳氏の分析方法は筆者より数段優っているように思う。その方法と結論に、筆者は全面的に賛成である。「年譜」や「繫年目録」の記述が訂正されることを望むものである。